



# 人生の三角波シリーズ

## 人間到る処 青山あり

第2回

### 英国到着と ロンドンでの生活開始

※三角波：時化た海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う  
※人間到る処青山あり：死して骨を埋める場所は至るところにある。故郷を出て活躍すべきだとの意。

フォト・ジャーナリストの加藤節雄さんを以前から存じ上げていたが、人生経験をうかがう機会には恵まれずにいた。昨年、加藤さんが日本の文化を英国に紹介されてきた功績で外務大臣賞を受賞され、その際に披露された経歴をぜひもっと詳しくお聞かせいただきたいということでこの対談が実現した。  
(センターピープル代表取締役 飯塚忠治)



**飯塚** 前号ではいざ英国に決めたときの心の高揚感を語っていただきました。欧州への旅は当時、若者の定番ルートと聞いていましたか……。

**加藤** そうです。横浜からバイカル号で津軽海峡を通り日本海へ。そこからシベリア大陸の東の果ての港、ナホトカまで行き、ハバロフスクから長距離列車で一週間かけてモスクワに到着しました。シベリア鉄道の、行けども行けども代わり映えない雪景色は退屈でしたが、「何でも見てやろう」という気持ちを共有する数人の日本人と熱く語り合ったり、まだ見ぬヨーロッパに胸をときめかせたり。英語ですか？ たいしてできなかったのですが、若さですね、「当たって砕けろ！」この精神だったと思います。この言葉は今の時代だと少し物騒ですね。

**飯塚** 実は私も高校時代から世界地図を眺めそのルートで来られればと思っていましたが実現はしませんでした。モスクワに着いてそれから？

**加藤** 当時はソ連と西側が「鉄のカーテン」で仕切られていた時代で、モスクワの至るところに銃を肩にかけた強面の兵士がいて、にこりともせずに警備について物々しい。そんな中、私はカメラを肩に市内をぶらぶら歩き、ときにはモスクワ川に

かかる美しい橋を撮影してみたり……。そのときです。私服の男が何か叫びながら私に向かって走ってきて、とっさに危険を感じた私は全速力で逃げました。振り返ってみれば当時はシベリア上空からの写真撮影も禁止されていたから、戦略的な拠点となる橋の撮影はスパイと思われるも仕方がなかったかもしれません。

**飯塚** 下手をすると、スパイ容疑で刑務所という可能性もあったかも……？ モスクワから英国に到着されたときの第一印象はいかがでしたか。

**加藤** 東欧諸国を通り、オーストリアの知り合いの家に寄ったり、ドイツやフランスを旅行しましたから、ドーバーに着くまでは日本から1か月以上もかけてようやくたどり着いたという感じでした。ドーバーの入国管理官が長髪、髭もじゃでヒッピーのような姿であったことにびっくり。英国は紳士の国というイメージをずっと持っていましたから。私も全く同じような格好でしたので親近感が湧き、住みやすい町なのかなと思った記憶がありますね。

**飯塚** ロンドンでの生活はここから始動ですね。

**加藤** B & Bで旅装を解き、英語学校に通うことから始まったロンドン生活ですが、そのうち学校の授業が少し物足りなくなり、友人に誘われてロンドン大学の学生寮であるインターナショナル・スチューデント・ハウス (ISH) にカメラを肩にぶらぶらと行くのが日課になりました。そこでお茶を飲んだり、安いランチを食べているうちに「お前はカメラマンか」とスタッフに聞かれて、ISHのブローチャー作成のための撮影を手伝ったりするようになり、自由でおおらかな雰囲気を楽しみました。

**飯塚** 当時の英国のおおらかさが目に見えるようです。ただそのままというわけにもいかないと思いますが……。

鉄道のレールは前に伸びているが、目の前が崖だったら？  
ときには崖のような困難を飛び越えつつ、文字通りシベリア横断鉄道を使って英国にやって来たフォト・ジャーナリストの加藤節雄さん。  
「フリーランスの仕事は決して『フリー』な状況ではないですよ」——  
1970年代からフリーのジャーナリストとして英国で活躍する加藤さんの半生の紆余曲折を振り返る。全5回シリーズ。

#### 加藤 節雄さん プロフィール

- 1941年……………5月5日端午の節句に東京に生まれる
- 1966年……………早稲田大学新聞学科卒業
- 1966～69年………キーストン通信社東京支局でフォト・ジャーナリストとして勤務
- 1970～90年………フリーランス・ジャーナリストとして英国、欧州のニュース・トピックスを日本のメディアに提供
- 1991～2002年………在英邦人向け情報紙「日英タイムス」の編集長として活躍
- 現在……………日本クラブ会報「びっくべん」編集長、日本クラブ理事。著書多数



**加藤** そうこうしているうちに最初にもらった6カ月のビザが切れるころになったので、ザ・カレッジ・オブ・ジャーナリズムというジャーナリストの専門学校に入学を申請。校長面接で即入学許可が出て、晴れて1年間ビザを延長できました。ここでフォトジャーナリズムやジャーナリストとしての文章の纏め方など大いに役に立つことを教わったと思います。

**飯塚** ところで、生活費は日本で蓄えられたものでやり繰りされてきたと思いますが、お金は出ていく一方という中で、どのようにされていましたか。

**加藤** もうお金が底をついてくるのが見えていて、そろそろ帰国の潮時と思っていたところに、日本の出版社からロンドンの成人教室で日本語を学ぶ英国人を取材してほしいという依頼がありました。学校では3人の英国人が日本語を学んでいて、「なんだが少し変わった人たちだな」という印象でした。

**飯塚** 1970年代に日本語を学ぶというのは、やはり変わっていますね。80年代初期からは日本の会社の英国進出に伴い、日本語を学ぶ動きが一つのブームにはなったと思いますが、それで？

**加藤** その3人の中の一人の女性から「私のフラットに来ない？」と誘われましてね。「えっ！ どうしようか」とときどき。この時点で自分の英語力には自信が出てきていたので、誤解したとは思えないけれど……。



ISHで写真の整理をする加藤さん(1970年撮影)

**飯塚** 初対面で!?(続く)

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます  
[www.centrepeople.com/japanese/article](http://www.centrepeople.com/japanese/article)

Presented by  
**centre people**  
Recruitment Consultants

情報を発信し続けるセンターピープルは、人材紹介、派遣のエキスパートです。  
誠意をもって心をこめたサービスを企業様、ご登録者の皆様に提供することを常に目指しております。